淡路花博25周年記念花みどりフェア第3回企画委員会　議事録

１　**日時**　令和６年３月26日（火）13:00～14:30

２　**場所**　兵庫県庁３号館６階第５委員会室

３　**委員総数及び出席委員数**

委員総数　　11名

出席委員数　 8名

４　**出席委員の氏名**

中瀬勲、入谷芳郎、高木俊光、田中まこ、古田菜穂子、堀内照美、三井雄一郎、光成麻美

（参考：欠席委員　門野隆弘、田辺眞人、原口晴美）

５　**議事**

（１）淡路花博２５周年記念花みどりフェア　実施計画（案）について

（２）ロゴについて

（３）展示・行催事計画（主なもの）について

６　**議事の概要**

議事について、事務局より資料１に基づいて説明を行い、審議を行った。委員の主な意見は以下のとおり。

【議事】（資料１）

（古田委員）

まず13ページの基本的な考え方。「淡路の魅力を体験していただく」「淡路の素晴らしさを磨き上げ、レガシーとして継承していく」という部分の淡路の「どんな」魅力を、淡路の「どんな」素晴らしさを磨き上げ、レガシーとして継承していくのかという部分の共通概念や言葉をちゃんと形に考えていった方がよい。そこが明解になってくると、実際の行催事計画でこれは即している・即していないという判断もできるのではないのか。

開催テーマの「自然と生きる、いのちをつなぐ淡路島」は素晴らしいテーマ。これらを淡路の魅力の中で体現し体感していただくというのがこの行催事だと理解をしているが、では、ここに書いてある内容がそれでよいのか。14ページの「淡路の魅力の体感」というところで、環境未来島構想というものに即してとあったが、それも大切なポイントだと思う。その意味では花と緑がいつでも楽しめる仕掛けの「いつでも」という考え方がよいのか。行事として

は常にお客さまの視点でいうと、どこでもいつでも花と緑があるというのはイベントとしては理解できるが、環境の観点でいうと「花と緑がいつでも楽しめるというのは何か細工をしているのではないか」「無理に植栽してないか」とか、大地や地域の地域性や土壌との関わり、持続可能性、環境未来島構想においてもレガシーを残していく上で、こういう展開がこれで良いのかという部分の視点に対して答えられるようにしていただきたい。

こういう部分はコンセプトの部分では非常に重要で、ここでかなりきっちりつくっても、実際にだんだん事業展開していくとしょうがないかなとか、予算の中で変わっていくところは致し方ないとは思っているが、少なくともまだそこの部分を考えられるのであれば、2025年は万博も含めてサステナビリティやSDGsの実践を含めて、環境問題に対してのグローバルな視点での取り組みの発表でもあるということに重なってくる。世界の方はあまり相手にしていないならいい（いいとは思わない）が、花の植栽も含めてそういった配慮ができているのかというところが「いつでも楽しむ」という概念と一致している、もしくはそこに新しい手法があって、それがまさに発信したいことだ、サステナビリティのためのもしくは土壌改良や土壌をよくするための工夫がここにある、ということがまさに発信できるポイントではないかと思うので、きちんと計画の中で分かるようにしていただきたい。

もう1点、目玉行事の「花とみどり、動物の織りなす光の共演」チームラボのこの事業について、チームラボのことは重々承知しており、予算も大体予測している。これで「命をつなぐ体験」になるのかということについては、もっと考えてほしい。イベントとしての目玉にはなるのかもしれないが、先ほど来申し上げている「いつでも楽しめる」ということへの考え方も含め、子供たちが動物の絵を描いてそれが動き出すということの中で、じゃあ実際に動物をじっくり見て描くのか。動物たちの命がある絵柄を見てとか、空想の中の、今、「お魚さんを描いてね」っていうと切り身を描く子供がいる時代で、それが浮いている。例えばもしチームラボにもこだわっているのであれば、本物の体験の中で、いかにバーチャルの中で自分が描いた絵柄が動き出すということが命をつなぐことになるのかということも含めて、動物の絵に命を吹き込むと、例えば切り身のお魚さんでもAIを使えば命になると思うことが、例えば人と本当につなぐことになるのかということ。チームラボの体験というのは非常に楽しいし面白いしわくわくする。それは子供たちにとっては面白い体験だが、それを本当の意味での命をつなぐ体験というものと重ねていくというのであれば、通常のチームラボが持っているお絵かきアニマルズ＆ペーパークラフトのものを再利用してやることによって、本当にここの意味性が、本質的な意味の目玉にそれがなるのかということは考えるべきではないか。多分予算もすごくかかるので目玉行事という考え方をしていると思うが、例えば中瀬先生がコーディネーターをされる国際シンポジウムでこの指針をきちっと考えて何を発信するのかという部分と、この目玉行事のアクションに乖離があると何だということになりかねない。例えば、この環境未来島構想においての花と緑を活用して我々は未来に向けてこんな宣言をしていく、というようなことが国際シンポジウムであっても。

花と土壌のつながり、土、大地のつながりという第1のつながりの部分がお花の中で、ここ

も我々の生命も食材もみんな土壌から来ている。この淡路島も今、その土壌改良の部分とか、そういったものに対して皆さん相当取り組んでおられると思う。このつながりで最後の方の「仕事」、次のページのレガシーの部分で、土のミュージアムのSHIDOさんと連携というのが少しあるが、やはり自然体験をどういう着地点で考えていくのかというところの大きな視点というのは非常に重要ではないか。お花を見るだけじゃなくて、お花とつながりのある土壌や、それらも含めて全ての自然の生命みたいなところに思いを馳せられる事業というのは難しいかもしれないが、それをやるのがこの大きなお金をかけてやる事業だと思うので、ぜひそこのところはもう一度きっちり考えていただきたい。いいコンテンツがたくさんあると思うので、その前段でつまずかないようにしてほしい。

（事務局）

まず、淡路島は非常に魅力的なところ。今、花と緑のイベントということで、考え方としては、「自然との共生」といったところを考えている。その上で自然からいただく魅力というのは、花の島・淡路島、あるいは食の島・御食国という言い方をしている。「花みどりフェア」と言いながら、タイトルだけ見ると花と緑だけに思われるかもしれないが、この根底に流れているのは「自然との共生」。従って「魅力」は、この「花みどりフェア」の中では、「自然」と「食」というところ。そうするとかなり幅広になるので、多分ぼやけているというふうに感じられているのではと思う。どれかだけに絞るというのは、先ほども話に出ていた「環境未来島構想」の「エネルギー」「農と食」「暮らす」というテーマとの整合性を考えたときに、やはり少し広げた中でコンセプトを置いて考えたのがこの案で、「自然」や「食」というテーマから「すまい」「人」「しごと」「エネルギー」というコンセプトをつくっている。今回は主なものを入れているが、もう少し他のものを入れながら、また体系づけた形で説明したい。

土壌の話については、夢舞台の自然再生の中でも御存じのとおり、盛り土をした上に木を植えたということがあり、木を植えたものがやはり実生でないとなかなか厳しいというところがある。かつてから段々畑にしてオリーブを植えたりとか、ミカンを植えたりとか、さまざまなことをやりながらいろいろ失敗もしながら、今の淡路島の農産物というのができあがっている。これについては、この主な事業の中に挙げていないが、そういう農産物の歴史みたいなところも取り上げるつもりをしている。

最後に、今回のテーマとしてどんなものをやりたいのか、そしていろいろ作為的にいろんなものを入れているのではないかというところだが、やはり大規模花壇をつくって、常に花のある状態にしていく。それは国営明石海峡公園も我々の花さじきも百段苑もそうだが、確かに季節に応じて球根を植え、草花を植え、苗を持ってきて生やしているというところがある。一方で、いつ来ていただいてもわかりやすい花を見せていくということは非常に重要ではないかなというふうに考え、これは花の島・淡路島という中で取り組んでいくべき案件かなというような風に思う。一方で、今後どうするかというところだが、さっきのシンポジウムも、その「人」のところの一番右側でも、サステナビリティ、これは中瀬先生の持論でもあるので取り入れたいというふうに考えている。生物多様性も含めて、自生種を使った花だけ

ではなくて、葉っぱ、あるいは枯れた実のところ、こういったものを見せていくという中で可能性のあるものを今後提案していきたい。これは世界的にはかなりトレンドになっているようだが、日本ではまだまだ雑草としか見ていないという方もたくさんおられるので、今回これは提案していきたい。今後のものというふうに考えている。

チームラボについては、すごくいいなと思っている。自分で想像した動物が動き出すというのも、自分の想像から命を吹き込むということで、事務局としては良いと思って考えたが少し浅はかだろうか。

（中瀬委員長）

チームラボはちゃんと注文を受けてくれるのか。一番最初に科学未来館でやったのが10年くらい前でほとんど進化していない。要は今風な注文をしたときに、チームラボが大枚はたいたぶんだけ対応してくれるのであればやればいいと思う。今までどおりの話で、今までどおりのシナリオでやるのだったら、もういいかもしれない。

（事務局）

かなり要望も言っていて、実際に私どももお金も無い。この金額でというようなことか、この場所でというのも、彼らの思うだけの大きさのハコというのは、なかなかこの地域にない。そういったこともあって、このハコでこの予算でこういうふうなことをやりたいということを話している中で、このコンテンツともう一つは動く花のところを一緒に歩くという「ケンケンパ」というコンテンツ、こういったものを提案いただいている。幾つかのなかから我々も選んでいる。

（中瀬委員長）

古田さんが冒頭に言われていた14ページの上の段の、特に大規模緑化・大規模花壇は本当にもうそろそろ終わりにしないといけない。ある意味で大衆受けして迎合していて、それでずっとやってきた。国営公園は全部そうで、花いっぱい使ってないのは淀川河川公園だけ。ところがもうええやんという時代に入っているかもしれない。そうすると、そこで何を考えるのかという、これをどう次にバトンタッチするかというアイデアは、今日幅広にヒントをいただいたと思うので、次にバトンタッチしていくときには、これをどう考えたらいいのか示唆が出るような。

（事務局）

まさに国際シンポジウムの中でも提言をいただきたいというふうに考えている。

（古田委員）

今説明をいただいたことを、もっと企画書に入れていくということが大事だと思う。先ほどの自生種の話もこれは素晴らしいなと思って説明を聞いていて、これが何でこんなに小さいのだろうと思う。ただ、それは未来志向型で考えている。今受けるものをやるものではないという前提でこの事業を考えているからだが、ただ皆さん自身の考えがとりあえず今多くの方に受けるものというお考えであるならば、それにたくさんのお金を投与してやるのかというのは皆さんのこれから考えていくべきこと。チームラボの活用についても同じ。彼らが

今やっていることを私も結構知っていて、幾らでお話しになったかちょっと分からないが、ぜひ、中瀬先生が今おっしゃったような新しいチャレンジの部分こそを企画書に、大事なことをきちんとフューチャーするというのは大切かと思う。

（事務局）

11ページの環境未来島構想の話は、環境未来島構想から持ってきているが、そういうことを全く書いてないので、祝詞を少し書く。

（光成委員）

14ページ15ページの内容を見ると、淡路にある素材の良さを活用したイベントが多いという気がする。素材ももちろんいいものが淡路にはたくさんあると思うが、やっぱりいろんな場所自体がすごく魅力的な場所だと思うので、素材だけではなくそのものが育てられている場所とかを見に、着目するようなイベント・ツアー的なものがあった方が、より魅力が伝わるのでは。サテライト会場の方もたくさん名前があるが、その辺との連携っていうのがより強い方が良い。個人的には淡路も楽しめる魅力っていうものが点在しているので、そういうものをつなぐものがイベントだけではなく、交通手段等も含めて関わる方がいいような気がする。

自生種緑化のガーデンだが、これは沢田と相談されていると思うが、テーマと期間的な問題で月末から4月の期間でこの写真のようなものはなかなか難しいかと。実際は枯れた姿をという部分も、この時期は枯れた部分を切ってしまって、次の葉っぱが展開する時期なので、緑がいっぱい茂っている状態よりかはこれから芽吹くという状態のものが多い印象がある。自生種っていうものを打ち出していくのか、淡路の自然の風景というものを打ち出すか、少し言葉の選び方は相談して決めた方がいい。

（事務局）

この期間、万博の期間は「淡路島博」という観光協会が主体となって行う行事と並行してやっていく。資料にそのようなことが触れてなくて、全く私どもの説明不足だが、そういうまさに体験型ツアーを観光協会中心にやっている。またフィールドパビリオンにも兵庫県が力を入れていて、それも淡路島に積極的に提案している。最終的にはそのようなものも一緒にやっていくので、現場にぜひ行ってくださいという形についてはカバーする。

（事務局）

ツアーについては、今後ツアー会社、それからホテル業界に説明会をしていくつもり。例えば現在、近ツリとは別に話をしていて、クラブツーリズムなど非常に素晴らしいホームページを持っているので、そちらの方に取り上げていただくといったこと。それからふるなびが今、ふるなびトラベルをしている。ふるさと納税をしたときにトラベルのポイントで返ってくるといったことで、サテライト会場を中心に花みどりフェアの会場で使えないかなと思っている。そうすると、ちょうど年末非常にふるさと納税の多い時期に、PRにもなると考えて、今調整している。

交通手段について、淡路島は非常に難しい。私もこの間洲本から夢舞台に帰るときに、バ

ス会社のバスの受付の方にどうやって帰ったらいいかと聞いたら一回舞子まで帰ってください。それからもういっぺん来てくださいと言われた。それでは来ることができない。少なくとも近隣地については自転車で回っていただこうかと、レンタサイクルを相当数各地に配置するようなことを考えていて、次回の企画委員会の中で御説明する。

自生種については仰るとおり、写真がちょっとオーバー。今、夢舞台の会場の温室の隣の芝生のところを一部提案できるような格好でつくりたいと考えている。こんなに大規模でもなく、今から植えてこんなにモリモリにならないというのは仰るとおり。もっともらしい、実質誇大広告にならないように、写真を探していきたい。いずれにしても、沢田先生であるとか、さっきも中瀬先生にも少しご相談したが、しっかりと自生種、近隣であるものでつくられる庭園が今後トレンドになっていくというのが見せられる、そして今後に提案できる庭園をつくっていきたい。沢田先生とも連携していきたい。

（中瀬委員長）

自生種で一番身近にあるのが園芸学校の出たところの広場にある盆景。あれは淡路産のクロマツと淡路産のセッコクと淡路産のヒバで作った最たる典型例が3つも転がっている。ああいうのを集めて展示するのも、一つの自生種緑化の一つの体。決して新しいことではなくて、そこら辺につくられているものを紹介するのも手だと思う。

（田中委員）

ネガティブな御意見もたくさんあったが、全体的にはよく考えられていて、すごく楽しそうだなと。例えば自分が1観光客として行くとしたらどうだろうと思って、さっきからお話を聞いていたが、わくわくする部分はいっぱいあったので、基本的にすごく素敵だなと思った。花が咲き乱れている大きな畑というのは、私も体の半分はそこに抵抗を感じつつも、では自分は行っていないかというと、現に自分も行っていて、写真を撮っていて、それを自分でSNSにアップしている。そうしている以上、大勢の方を引きつける魅力があるというのは確か。私は観光よりの人間だが、淡路島の良さを伝える以前の問題として訪れていただきたいというのがあるので、こういうイベントの時にやはり集客をして、皆さんに知っていただかないと。その辺を、決して「大きなお花畑をつくるのはいいんです」ということではなくて、ただ「皆さんにまずは淡路に足を運んでいただきたい」っていうことをどういうふうにアピールしていくのが一番いいのかと、さっきから頭を悩ませているところ。やはり観光で来る方たちは来たからには散歩したり、買い物したり、おいしいものを食べたいという、そこの部分をすごく求めていると思う。私たちの熱い想いだとか、背景も大事だが、単純に期間中にまた来たい、今度次はまた誰かを連れて来たい、と思ってくださるようなわくわくドキドキもたくさん用意して、堅苦しいものではなくて、自然にSDGs的な発想になっていくように持っていけたら本当は理想なのにと思う。

さっきの自生するものに関しても物理的に期間が制限されている中で絶対無理。そういう時にはやはり動画をフルに活用して、淡路島四季の四季館みたいな感じで、四季の淡路島が動画に入れば楽しめて、実際に違う季節にここに自分が来たような気分に浸れるような、そ

れを体感できるようなものがあれば。例えば春の部屋、夏の部屋、秋の部屋、冬の部屋みたいな四季の部屋があって、そこに入っていくとプロジェクションマッピングでもいいですし、普通の動画でもいい。3Dをフルに活用して、春に淡路島に来るとこんな感じだとか、夏に来るとこんな風に、秋はこんな、と順番に四季を楽しめるような動画を使って、その中で自生しているような植物も魅力をアピールできるようなもの。もちろん、さらにそれで子供たちが描いた動物が動いたらもっと楽しいのかもしれないが、何となくこの限られた1、2カ月の間に淡路の良さを全部知っていただくのは無理であれば、そういう動画で、今からだったら四季の動画も撮れると思う。ドローンとかも今ならば活用して、淡路島の地形や、少し離れたところから見るとこんなに大きな島だということ、いろんな要素がある島だということを、子供たちに知ってもらえるように魅力を伝えていけたら。サテライトもすごくいいが、ピンポイント過ぎて、これを全部理解して回る観光客の人って、一体どれだけいるのか。どこに行っていいのか分からない。多分、私の知人たちにパンフレットを見せた時に、彼らは「で、どこに行くのがいいの？」って、絶対に言ってくるのがもう想定できる。あまり欲張りすぎず、ちまちましたものをたくさんではなくて、「結局花みどりフェア2025は何だったの？」と言われた時に、何かジーンと残っているものがあるような企画にしてもらえたらうれしい。

（堀内委員）

私は2000年の花博から全ての花博に一回は訪れているが、印象的に残っているのが最初の花博。今、サテライト会場がいっぱいあるなかで、分散するとメインがぼやけているのではないかと思っていて、今の話を聞いて、「あんまり欲張らずに」というのはすごくいいと思う。島博との連携も聞かせていただいたので、サテライト会場の方にメイン会場でいろいろなやりたいことをやっていただいて、次に来た時にサテライト会場に足を運んでいただくというような流れが作れたらいいのでは。

実際住んでいる者としては、すごく車が渋滞する中で、多分行きたいところにたくさん行けないっていうことが起こる。地域住民としては渋滞して動けないということが起こるので、それを考えるとメイン会場にサテライト会場の方が来ていただいてやっていただいて、次の機会はサテライト会場に足を運んでいただくような流れというのは作れたらいいのではないか。メインのコンテンツの中にどんどん盛り込めたらいいという風に思った。

花がいつでも見られる状態というのもいいが、今の移住したい方とか、いろんな相談を聞いていると、その前後や中間、花が育つところから花が育って終わった後、また土に戻る、そういうところをすごく大事にしている人が多いので、そういう華やかな部分ではない部分も入れられるようなコンテンツがひとつふたつ入ってもいいのではないか。

（中瀬委員長）

この頃、北海道の千歳空港の近くの植物園では冬に行ったら枯れた花を鑑賞する。今日面白い話になっているのが、私もこんな博覧会場を海外の向こうで見ていて、日本から海外に行った人々が海外の博覧会に行って花いっぱいを見て日本に帰ってきている。その横で彼らはビオトープで生物多様性を見せているが、日本から行った人々がほとんどそこに足を運ば

ず、それで日本はこのようになってきた。ヨーロッパに行くとこれがもう今逆転している。そこら辺を今回問われている。そういう意味では、博覧会というので来てもらわないといけない、それが一つの学習の機会を与えているという意味合いを今まで出さなくても、博覧会の歴史はあった。今度は最終回なのでそれをどう加えるか、という議論が今ちょうどこの中でなされていると思うので、もう一度議論しましょう。

（三井委員）

明らかに、この13ページから14ページに繋がる時に生物多様性だ、SDGｓだというところが繋がらないと思いながら読んでいた。これは前回までもそうで、前回までの割り切りで言えば、それをきっかけに来てもらった人に何を持って帰ってもらうのかという割り切りだろうなというのが正直なところ。ただ、今の中瀬先生のコメント、ほかの先生のコメントも含めてそうだが、もう世の中は変わってきているというところを知って帰ってもらうことが大事だろう、ということは同じ思い。私であれば、それを事務所の人間であり、それから現場を管理していってもらっているセンターとか、もてなす側にもわかってもらうということが必要。花を咲かせる技術とか、そういうことも含めて見てもらうということもありつつも、その先に何があるかということは、現場でもできるようにしないといけないのかなということは感じた。

個人的には田中さんがおっしゃっていたが、とはいえいろいろな厳しいご指摘もあるが、ではこれが不出来かというとよくできていると思う。僕がひとつ抜けていたのは、阪神淡路大震災から30年というのは、これは個人的な意見として兵庫県に生まれた人間としてはそのことを改めて思い出させてあげたい。それからまだ色合いがどれぐらいかということはあるが、自分自身があまりできていないことでいうと、もう少し日本だけじゃないところに目を向けてもいいと思う。さっき中瀬先生もおっしゃっていました、世界の潮流を見ているとか、国際的だとかいうところでシンポジウムとか、子供がインドネシアの子と交流するとかというもの。

あと次回のテーマだと思うが2枚目に16ページに浜名湖花博のことがあったが、全然知らなかった。ということは兵庫県のこのイベントをやっても、ひょっとすると関西の人だって知らない人が多いということだと思うので、広報ってすごく難しいなということを感じた。次回の議論ではどうやって知っていただくかということが大事かなと思う。

最後に、14ページの左上のうちの花の写真の左上にある園内移動施設と呼ばれて園内を動くもの、ユメハッチ号の古いバージョンをモチーフにしているが、ここは権利的には別によいか。

（事務局）

使い続けて問題ない。

（中瀬委員長）

浜名湖の花博はツアー企画をしてクラブツーリズムにすごく載っている。淡路もその時期に来たら売り出したら良い。

（三井委員）
　僕は国土交通省の人間で、本省から言われてここに横浜の園芸博のバッチを今つけている。27年にあるが、結局、広報をしっかりやらねばとなっている。多分ここにいらっしゃる方ほとんどどんなものか知らない。イベントとしてあること自体知らない方が多いと思っていて、クラブツーリズムみたいに興味ある人に刺さるというのもいいと思う。それ以外のこの辺にいらっしゃる方が、少なくとも淡路まで行こうというきっかけになればいいと思う。
（入谷委員）
　私はやっぱり大規模花壇は永遠に不滅やと思っている。浜名湖の花博は今初めて知ったが、やはり向こうもSDGｓとかシュッとした感じか。
（中瀬委員長）
　浜名湖花博はあんまりここでは表には出ていないが、アートヴィクトリアっていうところ、オーストラリアと組んで、公園のマネジメントを始めている。だから、日本中が公園をみんなで管理しようというきっかけになったのが浜名湖花博。すごく画期的なことをここではやっている。オーストラリアから何人も来てプレゼンをして、それを兵庫県では有馬富士公園でしたり、兵庫県の県立公園でずっとしているが、それのきっかけをここでつくった。すごいことがここで起こったというのが、僕らのプロではそういう認識。
（入谷委員）
　このたび今2ページにいろいろ展開されているものを見たが、それぞれ予算の都合もあるのかもしれないが、新たな見どころいうか、見に行ける感じというのはちょっとあまり感じられなかった。従来のということになるかもしれませんけれども、出展庭園とか花壇のエリア。何かやる方向にあるような感じの淡路自然の庭園展は、温室の奥のあたりに一つだけぽつんといった感じか。枯れているのを見に行くだけみたいな感じ。
（事務局）
　これは今回できあがったものではなく、作る造園のところからできればと、作っているところも見せたいという風に考えている。過程も見せていきたい。ただ、大規模にはできないので、温室のところをこの日に合わせて今回リニューアルをするので、そこでは一定の観客を集めると思っている。また、これまで不人気でほとんど客が入っていない野外劇場と芝生広場の方にも客を呼べるのではないかというものを今調整している。これがなかったとしても足を運んでいただけるような仕掛けを今考えている。結果的にこれを見ないと、どうしてもそこを通れないという状況をつくろうとしている。
（入谷委員）
　例えばダンスとか淡路の芸能的なものみたいなイベントを野外劇場でやるということか。
（事務局）
　ダンスとかだけではなくて、この花みどりに非常に興味のある方々がそこへ行っていただけるだろうという、全国の皆さん方が知っているようなイベントを入れたい。かなり難航しながら調整しているので、次回言えたらと思っている。今回、目玉事業とか主なものという

ことなので、単発に入っているのが少し皆さん方に伝わっていないなと正直思っている。

（入谷委員）

1回目の時に少しお願いしたと思うが、次代を担う人材という意味で、造園技術とか志す学生とかが何か担う場があればということで、例えば学生さんだと、学校さん周りでよくあるパターンかもしれないが、その学生さんの出展、庭園や花壇などもあると思うし、あと、デザインコンクールとかで入賞された方の実際の庭を作成するとか。出展のにぎわいをもたすのであれば、暮らしの部分であればありきたりかもしれないが、グリーンインフラ等の紹介などもうまく取り入れてもらえればなと。

（中瀬委員長）

一度、人博の新収蔵庫の周りを見に来ては。住民参加で自生種緑化をやっていて、そういうのが自然の水を使って結構出てくる。

（高木委員）

シンプルにいうとたくさんの人に島に来ていただいて、またリピーターで来ていただく、魅力を感じていただいてリピートしていただく、最終的には観光事業者さんにお金が落ちるというのが極めて重要。満足していただくためには、メイン会場が極めて重要だということになる。特に淡路会場がメインの中のメインになると思うので、ここの会場というのは極めて重要だと思っている。だとすると、あれだけ並べていたサテライト会場にどんどん行ってくださいというのは1カ月強の中で非現実的だし、メイン会場に行って、そこで見学できて体験できてみたいなことが実現できないと満足度が上がらないと思う。ぜひともお願いしたいのは、これをそれぞれのサテライト会場で実現するのではなくて、メインのメインの会場にできるだけ集約をして、そこに行けばいろんな淡路の良さが体験できて、当然お花畑も見られて、ということで満足度が上がる。じゃあまた別のシーズンに来ようよというふうにやるべき。一方で、淡路島博に関して言うと、そういうメイン会場があるわけではない中で、島の中のそれぞれの体験コンテンツを現地に行って体感して満足してもらうということを実現する。そういう意味でいうとサテライト会場はどっちかというと、島博に少しお任せいただきながら、やはりメインの会場でガツンとインパクトのあるものをぜひともやっていただきたい。

それからいろんな体験ものでこれから予約が必要なものを振り分けしながらやっていくのであれば、島博の体験コンテンツというのは基本的に全部事前予約になっているので、予約の仕組み等を揃えていくことによって、お客様が混乱しないように仕組みを構築していきたい。当然島博のサイトから花博のサイトに飛んで見てもらえるようにはつくっていきたいと思う。また、既に例えば土のミュージアムとか、線香作りもそうだが、実は並行して動いているようなものがあるので、何か違う見え方になって混乱しないように作り上げていきたい。

（中瀬委員長）

あと、私自身気になっているのが、大阪の野鳥公園が今話題に上がってきた。縮小される。博覧会会場を工事したら、野鳥がなくなるというので、今議論が始まり出した。そういう意

味では、今度の博覧会会場周りの大木をどうするのか議論しているが、そこら辺が今、これから世の中を賑わすと思う。

それから14ページに吹き戻しの製作体験。これは1本いくらくらいか。写真家の木村さんなんかはポケットにいっぱい入れてみんなに配っている。

（事務局）

直近までは50円とかの値段だったが、物価高騰で今、市できちんと購入している分については市のネーミングを入れて1本150円に値上がりしている。

（中瀬委員長）

これをPR促進グッズにすれば一番いいと思う。

（事務局）

促進グッズにしようと思っていて、特に今後を担う子供たちがこれはずっと遊んでくれるのではないか。広まるのではないかと思っている。

（中瀬委員長）

淡路の人は、結構気の利いた人みんなポケットに入れている。この企画委員の先生方のポケットに5個ずつぐらい入れておいて、それでどこか委員会に行ったら出せるとすごいPR効果があるなと今思ったが、ちょっと高い。

自生種はパネル展をするなら写真はいくらでも提供する。屋久島の植樹屋さんが屋久島の山から持ってきてちゃんと自生種緑化している。各地の植物園に行って植物園の自然生態園に入ったら全部自生種緑化している。そういうのを集めてきたらいくらでもネタがある。そういうことはいつでも協力する。この14ページの蘭展、シンビジウムという洋蘭があるが、日本では春蘭。パンダという洋蘭がありますが、それは日本では風蘭。洲本の山に生えている。デンドロビュームは日本では洲本の山に生えている。そういうのを関係付けて。洋蘭が進化した結果が、淡路ではこうなっているとうまく結び付けたらいい。それは牧野植物園もやっている。そういうことをやると、シンガポールの蘭を見るだけではなくて、シンガポールの蘭から淡路の蘭を学ぶとかになる。そういう上手なシナリオをぜひ書いていただけたら、すごく奥深くなると話を聞きながら思っていた。

最後に先ほどのメイン会場でやるか、サテライト会場でやるかという話が、僕の中で今まだ結論が出ていない。とにかくこの前の実行委員会では、実行委員の人々からだいぶ私は名指しで「先生しっかりしいや」と言われた。島民の顔が見えないとだいぶ言われた。淡路の場合は博覧会を重ねるごとに島民参加もものすごく膨らんでいっている。要はお客さんも楽しんでいるけど、淡路の人々も楽しんでいる流れがずっと出てきている。そういう意味では、是非淡路の人々の顔がもう少し見えるような工夫をしていって、みんなで盛り上げているのだと。例えば大イベントはメイン会場でやってもいいけど、やっぱり淡路島の人々の意思でしている、自分達が主役だ、ということで楽しんでもらえるようなことをどううまくもっていくか。世界中でそんな風にやっている博覧会はなく、淡路で行っている博覧会の新しい潮流だと思うので、それぞれ住民参加型で住民が主導しながらサテライトを運営してやってい

くのも結構面白い。それと同時に皆さんが言う関係性の問題があるので、そこら辺をもうちょっと考えて、僕はこの流れは消したくないなと思っている。

（事務局）

次回ご提案をする予定だが、13ページの四角の2つの下の※のところ、事務局主催事業、今回いろいろ提案させていただいたのはこれだが、この他に各市の主催事業、そして最後には県民提案イベントというものがある。今回が最後なので「我々だけが」ではなくて、これを日常に持っていく。それは県民自らの発案で自らの行動でやっていただく、それも長くやっていただきたい、ということを今少し考えているので、次回にはそういった提案もさせていただきたい。

以上